

風土色／^{にめ}丹塗り調査にみる日本の赤色

Red Colors of Japan in Various Regions

石川 鉦二

松下電器産業(株)電化研究所

Shouji Ishikawa

1. はじめに

風土色と言うものが本来的に存在するものだろうか？

存在するとなればそれは人間や社会や生活や住居や道具などにどのような影響を及ぼし、さらに日本の各地域の色彩環境に風土色という現象はどのような分布を描いているかを探ってみたい、そんな必要と衝動に駆られた。

風土色の調査と言う限りにおいては、日本の各地域に存在する統一的な対象物が必要であることは言うにおよばず、それも歴史的というか時間的経緯を経たその地域の自然や風土や民族的な関わりをもった事象でなければならない。

そうした観点から各地域の神社仏閣の鳥居や伽藍の丹塗りを調査の対象とした。

2. 丹塗りの意味

丹塗りとは、材料を弁柄と鉛丹つまり酸化鉄と酸化鉛の混合色の朱塗りを言う。まれには漆(うるし)を用いる場合もあるが、そのほとんどはこの混合色である。

一般に神社や寺院の朱塗りのことを指し、その鳥居や神殿や伽藍の朱塗りの華麗な表面仕上げをいう。

役割は権威や魔よけ、そして建物を腐食から護る防腐剤と言われているが、奈良の春日大社にみる興福寺の守護が主といわれる限りでは権威と魔除けが本来の意と解釈することが望ましい。¹⁾

3. 風土色と分光現象

この風土色と分光現象については、これまでに地域と演色性による色彩の見え方を

解いたものや、²⁾ 日本の自然光の年間平均的色温度による地域の色彩変化を指摘したものがある。³⁾

日本列島は自然光や気温や湿度や日照時間によって各地域の赤、つまり「丹塗り」はそれぞれに異なるものと考えられる。

それは、南北に長い日本列島は緯度によってちょうど自然光の色温度が虹のように分光分布され、そこに存在する丹塗りの赤は自然に最も調和した見せ方を演出しているもので、それが風土色と言えるものと考えられる。

4. 丹塗りの現状

日本の神社や寺院には丹塗りのマニュアルは一切無いと言う。したがってその改造修復は建物の柱や梁の日陰になった変色の極めて少ない個所の丹塗りを掻き落として調色再現するものである。

しかしながら、それらの神社や寺院の地域的な色彩の統一は極めて継続的に何ら乱れることなく伝承されている。

したがって、各地域のそれらの神社仏閣の鳥居や伽藍は、伝統的にその地域の色彩を現在に留めていると言える。

そこから日本の“赤色”は三色であることを確認するに至った。

つまり赤色に限って言えば、日本の風土色は三色に分類されて存在すると言える。

5. 丹塗りの分布図

丹塗りの三色とは①紅丹(2、5 R 4 / 1 4)と②朱丹(7、5 R 5 / 1 2)と③茶丹(1 0 R 4 / 8)の三色におまかに言って分類することができることを確認し

た。(こゝで言う紅丹、朱丹、茶丹はあくまでこの説明上の仮称であることをご理解いただきたい)

さらにその立地的分布は現在までの調査では、東北地域を中心とする関東以東から北海道にかけてが紅丹の領域と考えられる。

そして朱丹の領域は関西を中心に中部地方から和歌山、中国、四国、北九州へと分布は帯状に南下している。

茶丹は宮崎、鹿児島、南九州から沖縄へと、つまり温暖湿地の地域全般にいたってその分布が見られる。

なお、それらの三色彩の地域境界線は残念ながら隈無く調査していない関係上現在の調査をさらに探めていく必要を感じている。

おまかには、推測も交えて言及すれば、紅丹と朱丹の境界は静岡と神奈川を境にして長野を南下する。そして中部と北陸をさらに分断して紅丹は山陰地方を山口県へとその中央を寸断して留まる。

朱丹と茶丹の境界は九州の中央部で分かれ、熊本県の南部もしくは鹿児島、宮崎の北部を南北の境界とするように考えられる。

6. 文化財伝承色

一方、この調査を契機に神社や仏閣ごとの色彩統合や色彩計画の伝承に必要なマニュアルを追ってみたが、その歴史や形跡は何処にもない。つまり人為的に継承された文化財伝承色は一切無いと判断してよい。

明らかにその証は風土性によるものであり稲荷や天満宮などの色彩の人為的統制はなく、すべて風土色と解釈してよい。

例えば日本の三大稲荷と言われる茨城県の風間稲荷(10R4/10)と京都府の伏見稲荷(10R4/12)と佐賀県の祐徳稲荷(7,5R3/10)は各地域の風土色がきちんと彩色されていた。

それは金沢の金沢神社や京都の北野天満宮、そして福岡の太宰府天満宮も同様にその土地の風土色が施されている。

7. おわりに

最後に、私は飽くまでも風土色と商品の関係を色彩計画のめんから探査してみようことを考えにいて本調査を試みた。

したがって、残された課題をさらに継続調査と考察で以下の視点を明らかにしたいと考えている。

- ①風土色とその境界線の明確化。
- ②商品への風土的色彩計画の反映。

「参考文献」

- 1) 館俊秀氏：奈良県教育委員会事務局、文化財保存主任の指導を受けた。
- 2) 伊東孝著：「色」の不思議(雄鶏社) 地域によって人の好きな色が違うわけ。P38~40。
- 3) 佐藤邦夫著：地域差による色彩嗜好を読む(にっけいざいん)1994年10月号、P50~56。

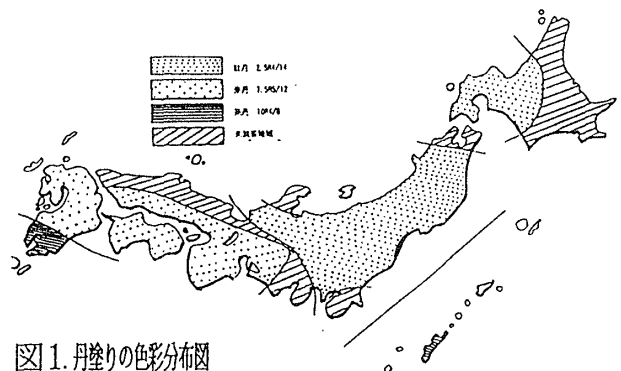


図1. 丹塗りの色彩分布図

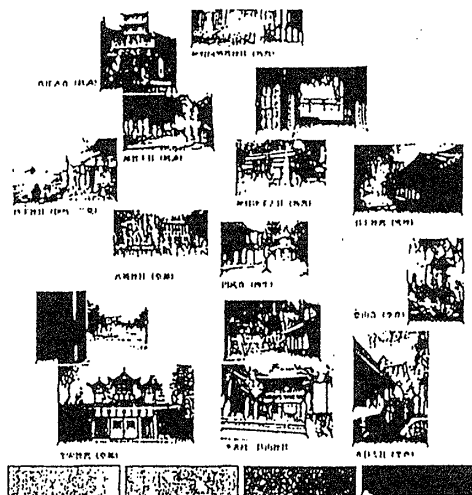


図2. 神社仏閣の丹塗りの現状

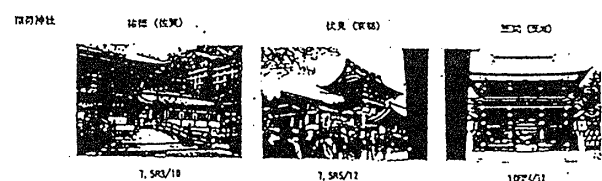


図3. 日本の三大稲荷にみる色彩比較